

Picture books of health science to develop health literacy

WATANABE Kanae

Keywords: health literacy, children, picture book, COVID-19

Abstract

Infection harm not only patients' physical health but also their mind and soul. Fear and anxiety about infection seriously affect human relations, and damage many people's minds and souls, as well as society. Because of the COVID-19 pandemic, not only adults but also children are affected, and even very young children come under great stress and uneasiness. Good health books to develop health literacy in young children can foster both their cognitive and non-cognitive skills. Cognitive skills provide correct scientific knowledge and could prevent children from experiencing unnecessary and excessive fear, anxiety, prejudice, delusion, and false rumors. Non-cognitive skills foster compassion in children and help society stay healthy and avoid past mistakes such as discrimination, prejudice, and judgment concerning infection. In particular, it is said that non-cognitive skills should be fostered during early childhood.

ヘルスリテラシーを学ぶ子どものための 健康学の絵本

渡 部 かなえ

キーワード：ヘルスリテラシー、子ども、絵本、新型コロナウイルス感染症

1. 感染症が描かれた物語

感染症は罹患した患者の身体の健康を害するだけでなく、心にも深い傷を残す。また、感染への恐怖や不安は人と人との関係にも負の影響を及ぼし、多くの人の心と社会を壊してしまう。新型コロナウイルス感染症が拡大している今、カミュの「ペスト」¹⁾、サマセット＝モームの「サナトリウム」²⁾（結核）などが世界的に読まれている。また国内でも、「火定」³⁾（天然痘）、「草の花」⁴⁾（結核）、「いのちの初夜」⁵⁾・「私が・棄てた・女」⁶⁾、「生きがいについて」⁷⁾（ハンセン氏病）等の感染症と人間の弱さ、社会の闇、苦悩と決意をとおして人間として生きることを考えさせる多くの作品が上梓されている。

2. 健康学の絵本・児童書

上記は大人のための本であるが、子どもたちに向けてかかれた健康や病

気に関する本もある。

ガンなど長期にわたる治療が必要な辛い病気の子どもたちの思いを掬い上げた本には、「電池が切れるまで—子ども病院からのメッセージ」⁸⁾、「雲のむこうに虹がある—がんとたたかった子どもたち」⁹⁾ など、大人も子どもも読めるものがある。

現在、子どもを取り巻く環境の最大の不安要素は新型コロナウイルス感染症の拡大である。子どもたちも不安や心配な気持ちでいっぱいになっている。そんな子どもたちに寄り添う絵本「My Hero is You」¹⁰⁾ が、国連の関係機関である「機関間常設委員会 (IASC)」の「緊急時のメンタルヘルスと心理社会的支援に関するレファレンス・グループ (MHPSS RG)」によって作られ、世界中の子どもたちに届けられた。主人公はサラというコロナで不安な気持ちになっている女の子で、大好きで頼もしい科学者のママに「サラにはみんなのために元気でいてほしい、ママのヒーローでいてほしい」と言われます。そんなサラが夢の中で、アリオという翼を持つ大きな生き物の背中に乗って旅に出て、多くの子どもたちと出会い、みんなが思いやりの気持ちをもって、手を洗い、家にいることで、大好きな人たちが元気でいられるように助け合えるということを知る、というストーリーになっている。子どもの年齢が低い場合、保護者や保育者（幼稚園教諭や保育士など）が子どもと一緒に読んであげること、感染予防の重要性とメンタルヘルスの重要性を、子どもは理解でき、大人は再確認することができる。

また、ヌーピーやチャーリー・ブラウンというチャーミングなキャラクターで人気のチャールズ・M・シュルツ氏の絵本、「チャーリー・ブラウンなぜなんだい？ —ともだちがおもい病気になったとき—」¹¹⁾ は、白血病になってしまったジャニスという女の子のお見舞に行ったライナスは、けなげに頑張って闘病しているジャニスを見て心が痛み、不条理を感じて、

病院からの帰り道で一緒にお見舞いに行ったチャーリー・ブラウンに「どうして、チャーリー・ブラウン、なぜなんだい？」と聞く。チャーリー・ブラウンにも答えることはできなかった。帰宅して姉のルーシーに、「嫌な子だから病気になった」と心無いことを言われたり、ライナスがジャンスに触れた手でルーシーに頼まれたミルクを持ってきたと知って「いない」と不愉快なことを言われて、ライナスは怒りを覚る。また、白血病が寛解になって学校に一時登校してきたジャンスがかぶっていた帽子をいじめっ子がとって髪の毛が抜けてしまったジャンスの頭をからかう。これらのルーシーやいじめっ子の言動は、病気の子どもたちを悩ませるいじめや無理解の一例である。姉のルーシーはライナスの抗議を無視したが、いじめっ子はジャンスに謝った。この絵本はがんの子どもの辛さをみんなが分かってあげることの大切さを伝えている。日本では小学校5年生への推薦図書であるが¹²⁾、漢字にはフリガナがふられており、幼児でも保護者や保育者と一緒に読むことができる。また、もっと年長の中学生や高校生にとっても多くの気づきや学びを得ることが期待される絵本である。

ニルスのふしぎな旅¹³⁾にも、感染症にまつわる問題が描かれている。ニルスの友人の孤児マッツとオーサは、両親や姉と幸せに暮らしていたが、ある日、両親が病気の旅の女を気の毒に思って家に泊めてあげたことから悲劇が始まった。この女は結核を患っていて、姉たちが感染して死亡し、絶望した父は家を出て行ってしまい、母も結核で亡くなってしまう。母親の死後2年くらいたってから二人は学校で開かれた講演会で、これは結核という誰でも罹りうる病気であると教わる。正しい科学の知識を得たことで、二人は勇気と希望を取り戻す。健康と病気の正しい知識を持つことが、体だけでなく心の健康を守り回復させることを、この児童書は伝えている。

本ではないが、高校生に対して、感染症が拡大する社会で、差別や排斥、必要物質の独占のような振る舞いをする事なく、人間らしく生きてゆく

ことを語りかけたイタリア・ミラノの校長先生が自身の高校のHPに掲載した文書¹⁴⁾が世界中で共感呼んだ。校長先生はイタリアの古典文学マンゾーニの「いいなづけ」¹⁵⁾を取り上げ、当時、ペストが大流行して多く人が犠牲になっただけでなく、外国人やよそ者を危険視する、役所間の激しい対立、デマは根拠のないうわさ話の拡散、生活必需品の奪い合いなどが起こり、人々がいっそう危険な状態に追い込まれていったことが紹介されている。突然ロックダウンを言い渡された生徒たちへの、中世のペスト大流行の時の轍を踏むことなく、冷静さを保ち、必要な予防策を取り、スーパーや薬局に押しかけて買い占めるようなことはせず、理性的な思考をもって私たちの貴重な財産である社会組織や人間性を守るようにという呼び掛けは、この高校の生徒だけでなく、世界中のあらゆる年代の人の心を打った¹⁶⁾。

3. 子どものヘルスリテラシーを育む健康学の絵本

今、日本だけでなく世界中が感染症の脅威にさらされている。患者や感染の疑いがある人だけでなく、感染症対応の最前線にいて市民の命と健康を守るために大変な思いをして働いている医療従事者やその子どもたちが、差別や偏見でつらい思いをした・しているという現実がある¹⁷⁾、¹⁸⁾。見えない敵にいつ襲われるか分からないという恐怖にとらわれた時、人は本能的に同じ人間を恐れ、攻撃の対象にしてしまう。ウイルスという敵を防ぐための対策は必要である。しかし、ウイルスを恐れるあまりに大切な人たちを傷つけ孤独に陥らせてしまったら、人間関係が崩壊して不穏な社会になってしまい、子どもたちは一層不安になりストレスを溜め込んでしまう。その結果として、いじめが発生している¹⁹⁾。ウイルスとは何か、感染症とは何かを説明している本は子どもたちが病態を理解するには有効であり、

感染予防に役立つが、それだけではなく、正しい知識を持つことが、必要以上に恐れたり不安になったりデマや迷信、妄想にまどわされたりすることを防いでくれる。また、病気の子どもの辛さをみんなが分かちあけることの大切さ、人間らしい思いやりの心をもつことの大切さを、健康についての学びを通して考えることができる絵本は、いじめから子どもたちを遠ざけ、子どもたち自身を守るだけでなく、社会が健全さを保ち、感染症に関連する差別や偏見、排斥や暴力などの過ちを繰り返さないためにも大切である。

以上のことから、子どものヘルスリテラシーを育むための健康学の本とは、正しい知識を得るための認知スキル (cognitive skill) だけでなく、寛容性や意欲、協調性、忍耐力、自制心などの非認知スキル (non-cognitive skill) の両方を育むことができるものであると結論付けることができる。とくに後者の非認知スキルは幼児期に育むことの重要性が指摘されており²⁰⁾、絵本という幼児が読める幼児がなじみやすい形で提供されることが望ましい。

【参考文献】

- 1) Albert Camus, *La Peste*, Independently published, 236p, 2017.
- 2) W. Somerset Maugham (著), 金原瑞人 (編), *The unconquered/sanatorium*, 青灯社, 174p, 2013.
- 3) 澤田瞳子, 火定, *PHP 研究所*, 414p, 2017.
- 4) 北条民雄, *いのちの初夜*, 角川書店, 257p, 1955.
- 5) 福永武彦, *草の花*, 新潮社, 320p, 1956.
- 6) 遠藤周作, *私が・棄てた・女*, 講談社, 254p, 1969.
- 7) 神谷美恵子, *生きがいについて*, 神谷美恵子著作集 1, みすず書房, 288p, 1980.
- 8) すずらんの会, *電池が切れるまで—子ども病院からのメッセージ*, 角川学芸出版, 158p, 2006.
- 9) センター・フォー・アティテューディナル・ヒーリング (著), 榎戸かし代 (翻訳), *雲のむこうに虹がある—がんとたたかった子どもたち*, ほるぷ出版, 53p, 1985.

- 10) IASC In-Agency Standing Committee, My Hero is You, Storybook for Children on COVID-19, <https://interagencystandingcommittee.org/iasc-reference-group-mental-health-and-psychosocial-support-emergency-settings/my-hero-you>, (閲覧日：2020/06/25),
- 11) チャールズ M. シュルツ (著), 細谷亮太 (翻訳), チャーリー・ブラウンなぜなんだい? ともだちがおもい病気になったとき, 岩崎書店, 44p, 1991.
- 12) 東京都立図書館, 5年生の国語教科書紹介本のリスト, (閲覧日：2020/06/25), www.library.metro.tokyo.jp/pdf
- 13) セルマ・ラーベルレーヴ, ニルスの不思議な旅〈1〉〈2〉〈3〉, 偕成社, 299p, 309p, 298p, 1982.
- 14) ドメニコ・スクイッラーチェ (Domenico Squillace) 校長, ミラノ・アレッサンドロ・ヴォルタ科学高校 (liceo scientifico Alessandro Volta), (閲覧日：2020/06/25), <https://www.liceovo.it/nuovo/la-scuola/dirigente-scolastico/1506-lettera-agli-studenti-25-febbraio-2020>
- 15) アレッサンドロ・マンゾーニ (著), 平川祐弘 (翻訳), いいなづけ—17世紀ミラーノの物語〈上〉〈中〉〈下〉, 河出書房新社, 480p, 464p, 464p, 2006.
- 16) 朝日新聞デジタル, 休校の今, 皆さんに伝えたいこと イタリアの校長が話題, 2020年3月2日, <https://www.asahi.com/articles/ASN316KWHN31UHBI02W.html>.
- 17) 朝日新聞デジタル, 医療従事者や家族へ差別か「子どもの登園拒否された」, 2020年4月26日, <https://www.asahi.com/articles/ASN4T71VHN4TUTPB006.html>.
- 18) 毎日新聞, 医療従事者へのコロナ差別 情報開示で偏見改善, 2020年7月14日, <https://mainichi.jp/articles/20200714/ddm/003/040/096000c>
- 19) 朝日新聞デジタル, 「感染者責めないで」文科相、いじめや誹謗中傷に声明, 2020年8月25日, <https://www.asahi.com/articles/ASN8T5DNRN8TUTIL02G.html>.
- 20) James J. Heckman, Giving kids a fair chance, MIT Press, 148p, 2013.